

船井情報科学振興財団 2014 年度 留学前報告書

2014 年 6 月

金石大佑

2014 年 8 月より、米国のカルフォルニア大学バークレー校に進学予定の金石大佑と申します。早稲田大学で機械工学の学士及び修士号を取得しており、渡米後もこれまでと同様に機械工学を専攻します。今回の報告書は、「留学前報告書」として、主に、米国大学院に留学を決めた動機やその準備について述べさせていただきます。

留学を志した経緯

三日坊主を繰り返している日記を見返してみると、私が海外留学を意識し始めていたのは、卒業研究を始める前の学部 3 年生の終わりでした。その理由は、「日本人以外とのコネクションができる」・「世界のトップスクールの学生と自分にどれだけの差があるのかを知りたい」といったもので、他の Funai Overseas Scholarship (FOS) の他の方々のような明確な動機はありませんでした。そのため、ただ海外に行きたいだけなのではないか、そして数年間をかけて留学するほどの意志があるのか、といった不安を抱えていました。そんな中、先輩からの紹介で「ヴルカヌス・イン・ヨーロッパ・プログラム」という、欧州で 1 年間の語学兼企業研修を行うプログラムを知ったことから、1 年間程他の人よりも遠回りするものの、海外大学院留学及び自分の将来の進路について改めて考える時間を設けました。その結果、研究のように新しいことに挑戦することが好きな自分を確認することができました。加えて、会社の上司との会話等を通じて、将来海外での就職を視野に入れた場合、日本とは異なり Ph.D の有無がその後のキャリアに大きく影響することも実感しました。そこで、実用的なロボットの研究・開発がなされており、また今まで行った経験のない米国大学院の Ph.D 課程に進学して、研究を行うことを決意しました。そこで、欧州から帰国し、早稲田大学の修士課程に復学した後、留学に向けての出願準備を始めました。

留学に向けての出願準備

欧州から帰国して復学後は、すぐに研究活動に勤しみました。一般的に、大学院留学を目指す上で、論文投稿や学会発表等を通じて、良い研究成果を挙げていることは多いに有利に働くと言われます。しかし、私の場合、卒業研究で良い成果を挙げられていなかったため、新たな研究テーマを模索しました。このような事情で、他の修士生よりも研究活動に出遅れており、国際会議等で海外の先生方に会うことが出来なかったため、修士 1 年次の終わりには、指導教官から米国大学院で教鞭を取っている知り合いの先生方の連絡先を伺い、コンタクトを取るようになりました。そして、実際に大学を訪問して、先生方や研究

室の雰囲気を確認しました。また、留学している友人達からも情報を集めることで、徐々に出願先の絞り込みを行いました。修士 2 年次からは、本格的に出願するための準備を開始しました。夏頃から奨学金に出願を始めると同時に、米国大学院出願に必要な SOP (Statement of Purpose) や PS (Personal Statement) の構成についても検討を始めました。推薦状は、指導教官と学部当時に講義を受講していた先生、そしてドイツで企業研修を行っていた際の上司 (ドイツ人) をお願いすることで、出願に必要な書類を整えました。

出願・進学先の決定と今後の目標

その結果、出願した 2 校の内の一つである、カルフォルニア大学バークレー校から無事合格通知を頂くことができました。FOS の同期よりも合格通知が届くのが遅かったこともあり、面接時に先生方からいただいたアドバイス通りに、もう少し出願先を増やせば良かったかなと思うこともありました。ただ、結果から見れば、出願校を絞ったことにより出願先の SOP 等を推敲できたことは良かったと思います。

進学先であるカルフォルニア大学バークレー校では、ウェアラブルロボットのような、人が利用するロボットに関する研究を行っていく予定です。私が興味を持っている研究分野は、昨年のキャンパスベンチャーグランプリ (CVG) 東京エリアで入賞という評価をいただけたように、人の生活を豊かにすることができると信じています。今後は、進学先で良い研究成果を挙げることで、財団設立代表者である船井哲良様のように、人の役に立つ製品を生み出せるよう、努力していく所存です。

これから留学を目指す方へ

約 2 年間の留学準備と出願した結果を照らし合わせて考えてみると、実際に志望校の先生にお会いしたこと、そして奨学金を獲得できたことの 2 点が合格を大きく引き寄せた理由だと思います。前者については、志望校の先生方に相談できるだけでなく、研究室の雰囲気やキャンパス等、その土地の気候や雰囲気も味わうことができるので、余裕があれば、出願前に一度訪問してみることをお勧めします。そして、後者については、進学先の先生にお会いした際に、奨学金の有無は可否に影響するとアドバイスをいただいたことや、他の先輩方や友人からも同様の内容を伺っていることから、できれば出願前の時点で、奨学金を獲得することをお勧めします。

一方で、出願時に最も足を引っ張ってしまったと思われるのは、英語です。欧州から帰国した直後に、ほとんど TOEFL 対策をせずに受験し、92 点を出したのが災いしました。その後、各セクションの対策を少しずつ進めていけば、トップスクールに必要な点数である 100 点を越えるだろうと甘く考えていたため、最終的には 100 点を越すことができませんでした。TOEFL の場合、セクション毎に点数がばらつくので、100 点を越すまで気を抜くことなく勉強を続けることが重要だと思います。

また、留学の成功体験に焦点が当たることが多く、留学する人はモチベーションが高く

活動的で、自信のある人が多いと思われがちです。しかし、実際のところ、自分の出願までを振り返ってみると、周りが就職活動を終えて早々と進路が決まっていくのに対し、年を越すまで進路が決まらないことや、修士研究の追い込みと出願締め切りの時期が重なる等、精神的に辛かった時期の方が多く、あまり活動的に動いていたようには思えません。また、出願時には、ドイツに居た経験はあるものの海外で生きていけるとは思っていませんでしたし、Ph.D を取れるだけの実力があるとも思っていませんでした。ただ、今まで通りやればきっとなんとかなるという根拠のない自信と、新たな環境に飛び込もうとする少しの勇気があっただけだと思います。ですので、もし留学を目指しているものの、自信が持てずに一歩が踏み出せない方がいましたら、ぜひ根拠のない自信と飛び込む勇気をもって行動に移してみたいかでしょうか。留学が実現できるか否かは、自信の有無等より、出願を見据えて行動を取れるかどうかだと、私は思います。

最後になりますが、奨学生として採用くださった船井情報科学振興財団の皆様、留学を応援いただいた指導教官や先輩方、両親に感謝申し上げます。